

齋藤委員提出資料

- 「「鉄道自殺」英国における鉄道自殺の報告書」
- ポスター「第32回日本自殺予防学会総会」
- ポスター「第33回日本自殺予防シンポジウム」

第2回自殺対策推進会議

「鉄道自殺」 英国における鉄道自殺の報告書

来る9月14日からスウェーデンのストックホルムで International Association of Suicide Prevention (国際自殺予防学会、通称 IASP 「アイアスプ」、本部フランス) が開催されます。これに先立って、すでに「アイアスプ」はWHOと連携して、9月10日を「国際自殺予防の日」(First World Suicide Prevention Day)と制定し各国に呼びかけております。

さてこの国際学会に先だつて、英国シェフィールド大学の教授 Philip Scager 氏らが、英国における鉄道自殺に関する調査研究報告書を刊行しました。

すでに1999年のアテネ会議で彼はその一部を報告してくれましたが、最終的な研究報告をぜひ送って欲しいと希望しておりました。このほど彼の同僚である Gordon Grant 教授から A4版238頁に及ぶ膨大な報告書が送られて参りました。

英国の自殺率はわが国よりはるかに少ないのですが、自殺予防に関する国家的な取り組みがなされ、半世紀も前からの Samaritans (英国いのちの電話) による民間の自殺予防活動が実施されています。ことに鉄道は自殺が多発する場所であり、わが国でも JR 中央線に自殺が多いことはよく知られています。ところが鉄道会社・警察は一切そのデータを公表せず、したがってその実態に関する疫学的な調査はまったくなされておられません。路線ごとの自殺数、プラットフォームか踏切か、列車のスピード・種類・色、自殺者の性別・年齢・病歴・家族状況、あるいは季節・曜日・時間帯、あるいは遺族・鉄道関係者・遺体処理チームの事故直後の反応、彼らへのこころのケアはどうなっているのか。

こうした調査研究や事後処理が適切になされてこそ、有効な自殺予防策が可能となります。つまりこの不幸な出来事をただあきらめ、覆いをするだけで何も学ばなければ悲劇は繰り返されます。英国ではかつては自殺が多発していましたが、わが国との違いはこれをタブー視せず、国も民間もこれと正面から取り組んだことです。わが国でも平成13年から、自殺防止対策事業を重要な施策として立ち上げ、さまざまな取り組みがなされております。その一環として、最近国立社会保障・人口問題研究所「自殺による社会・経済へのマクロ的な影響調査(平成13-14年度)調査研究報告書I」が刊行されました。画期的な調査研究ですが、同種のもので鉄道自殺の実態についてもなされることを強く要望します。

別紙に英国における今回の報告書について、ごく概略を紹介しました。

2003年 9月8日

日本自殺予防学会
常務理事 斎藤友紀雄

RAILWAY SUICIDE

INVESTIGATION OF INDIVIDUAL AND ORGANISATIONAL CONSEQUENCES

A Report of the SOVRN (Suicides and Open Verdicts on the Railway Network) Project

Rachel Abbott, Sam Young, Gordon Grant, Peter Goward, Philip Seager, John Pugh and John Ludlow

First published in July 2003 by Doncaster and South Humber Healthcare NHS trust, Research Education Development Centre, St. Catherine's Tickhill Road, Balby, Doncaster DN4 8QN.
Printed in the UK by J.W. Northen Ltd., Sheffield ISBN 0-9545638

2001年、英国（イングランドとウェールズ）の自殺数は3,389件（男2,649女740）で、自殺率6.4であった。鉄道自殺は1992/93年に179件であったのが、00/01年には203件と増加傾向にある。年齢は30代がもっとも多く、40代、20代と続いている。無職者が36.8%でもっとも多く、有職者（含パート）28.9%、退職者17.1%となっている。自殺の危険因子としては半数以上が何らかの精神疾患があるか、長期にわたる身体疾患が指摘されている。また精神疾患の中では、大うつ病がもっとも多く23.8%、統合失調症14.3%となっているが、特に病歴なしも19.0%ある。こうした調査については自殺者遺族に面接し、生前の生活について聞き取り調査をするなど、いわゆる「心理的剖検」が行われた。

自殺の仕方としては、「線路に立ちふさがる」が多く、「列車の前に飛び込む」がこれに次いでいる。また凄惨な現場にたまたま遭遇した運転手らの生の声なども収録され、彼らに対するこころのケアなど（いわゆるデブリーフィング）などが実施されている。